人間福祉学科実習アンケートの実施から得られた実習の在り方に関する考察

－全ては利用者のために－

木本　明　　朝倉　和子　　中島　直行　　西口　守
宮本　佳子　　吉賀　成子

例えば，医師，看護師の養成課程では，それらの大学，学部に付属病院等を設置して，具体的で身近な実習先を確保し，双方の密接な関係性の中から，それぞれの養成課程における実習を位置付け，実習の在り方を具体的に点検し続けてきていることと比較して，社会福祉職の養成課程における実習の在り方は，未だにきちんと確立されているとは言い難い状況にあり，従来から社会福祉職養成課程に関係して，少なくない問題点の指摘や改善のための方向性が議論されてきている経過がある。

ここでは，実際に本学人間福祉学科に在籍する学生が，社会福祉援助技術現場実習，あるいは介護実習に取組む過程で，実際にどのような問題点があり，それらをどのような方向で改善していく必要があるのかを明確化していくために，社会福祉援助技術現場実習，介護実習を終えたばかりの学生の協力を得て，「実習に関するアンケート」を実施し，そこから得られた知見を整理，考察したものである。

キーワード：社会福祉援助技術現場実習　介護実習　実習先施設との協働　実習の満足度

はじめに

現在，本学においては３年次，４年次にわたって社会福祉現場実習が実施されている。この現場実習は，実際に，学生が卒業後に社会福祉実践，あるいは介護福祉実践に携わっていく前段階における，たいへん重要で貴重な経験になっていると思われる。

他方で，従来から，大学の社会福祉系学部・学科における社会福祉実習及びその実習指導のあり方については，様々な議論が行なわれてきている経過がある。

こうした議論は，例えば，社会福祉士の現場実習としては 180 時間及びその実習指導として 90 時間という時間制約の中で，実際に，学生＝実習生が実習先機関・施設における実習を通して，何をどのように学んでいくのかという主題に関係して行なわれてきている。

このような議論は，第一に，大学・養成校側が社会福祉現場実習（以下『社会福祉実習』とする）及びその実習指導に際して，学生＝実習生を中心にして，実習先機関・施設といかに協力・連携していくことが必要なのかに向けられていなければならない。

さらに，第二に，社会福祉実習及びその実習指導を通して，学生＝実習生自身が社会福祉職，あるいは介護福祉職として，何を，どのようにして身につけていくのかという，具体的で大切な問題との関連の中で議論されるのでなければならない。

そこで，人間福祉学科では 2006 年 10 月の時点で，社会福祉実習を終えたばかりの学生の協力を得て，「実習に関するアンケート」を実施し，

人文学部人間福祉学科

社会福祉専攻の４年次生 32 名と，介護福祉専攻の４年次生 28 名の合計 60 名からの回答を得た。

ここでは，この「実習に関するアンケート」の実施によって得られた，学生＝実習生自身の声・意見から得られた結果を，整理して論じるものである。

第１章　研究の目的と方法

（１）　研究の目的

本学科においては，社会福祉専攻が社会福祉実習として 180 時間の配属実習（フィールド実習）と 90 時間の実習指導があり，また介護福祉専攻では介護実習として 488 時間の配属実習と 90 時間の実習指導がある。

ところで，社会福祉を取り巻く状況は制度の面でも生活場面においても大きく変化している。制度の面では介護保険法に代表されるように，公的介入としての「措置」が極めて限定的になり,「契約」によってサービスを利用できるようになった。また虐待に代表される生活問題は，支援の困難さを明らかにしているのであり，この意味でも社会福祉専門職の現実的な問題解決能力の向上が問われているところである。

社会福祉士と介護福祉士は，生活困難に直面する人々に対して，社会資源を活用し本人のニーズに基づいて，個別的サービスを提供しその困難の解決を図る社会福祉専門職である。これらの専門職の養成において,「現場実習」の果たす役割は大きい。現に本学の卒業生を含めて，実習の経験を通じて大きく成長していることは事実である。

しかしながら教員にとっては実習現場への定期的な訪問や実習計画書の個別指導，実習後のスーパービジョンなど「手がかかる」教育であるにもかかわらず，一方では学生自身が実習に対して様々な「不満」を感じていることは聞き及んでいる。また学生が実習を通じて何を学び，そのことが専門職としての問題解決能力に対してどのように寄与をしてきたのかが不明確であるとの声も教員ばかりでなく学生自身からもあがっていることは真剣に受け止めねばなるまい。

このような状況をふまえて当事者である学生自身が実習前教育（指導），実習中教育，実習後教育（指導）において実習の意味，意義，内容，方法についてどのように受け止めているのかを明らかにしなければならない。つまり実習システムは専門職養成にとって効果的で効率的なものかどうかを検証する必要が出てきているといってよい。

またこれらの調査を通し，学生の専門職としての育成について大学と現場がどのような協働関係を構築する必要があるのかを，今明らかにしなければならないと考えるものである。

（２）　研究の方法

1）調査の方法

集合調査

対象学年の授業時に教員が調査票を配布し回収した。

2）回収結果

社会福祉専攻：48 票配布，32 票回収
回収率：66.6％

介護福祉専攻：28 票配布，全票回収
回収率：100％

3）対象学年

社会福祉専攻　４年生
介護福祉専攻　４年生

4）実施時期

2005 年 9 月最終週から 10 月第 1 週

5）調査票のデザイン

①対象となる実習

社会福祉専攻

1 段階と 2 段階（最終回）

介護福祉専攻

1 段階と最終段階（介護は４回あるため最終回とした）

②調査項目

社会福祉専攻と介護福祉専攻は，目指すべき実習内容は異なるが,ア）目的の理解,イ）課題の理解，ウ）実習方法の適切な選択，エ）現場での職員との連携，オ）ソーシャルワーク･介護過程の理解,カ）満足度,キ）社会福祉専門職としての専門性や業務理解，ク）課題解決方法については同一の基盤にあると認識して設問を作成した。

なお，選択肢は基本的に択一方式を採用

し，最後に自由意見が記載できるようにした。

第２章　調査研究の結果

（１）　社会福祉専攻について

①　実習前教育

社会福祉専攻では，社会福祉実習として，３年次に 12 日間，原則春季休暇中（1 段階），４年次に 12 日間，原則夏季休暇中（2 段階）合計 24 日間，180 時間の実習を行っている。実習先施設機関も児童，高齢者，障害者（児），行政機関と多岐に及んでいる（表１（社）（『社』とは社会福祉専攻の略，以下，同じ））。

表1(社) 実習でどの領域に行ったか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
児童相談所	0	0.00	4	12.50
児童養護施設	2	6.25	0	0.00
福祉事務所	3	9.38	2	6.25
老人福祉施設	16	50.00	10	31.25
障害者福祉施設	10	31.25	8	25.00
社会福祉協議会	0	0.00	3	9.38
その他	1	3.13	5	15.63
総計	32	100.00	32	100.00

また，より多くの福祉現場での体験を目的とし，１段階と２段階で異なる福祉現場領域で実習を実施することになっている。しかし，表 2(社)，表３（社）より実習前教育での実習課題やその達成方法の明確化について，１，２段階において差異がみられないことから，異なる福祉領域での実習は“積み重ね”という視点から見ると１段階の実習が活かされきれていない部分も窺える。

表４（社），表５（社）は学生自らが実習を行う施設について事前に施設基盤やその他あらゆる情報を収集する必要性，重要性にどれだけの気づきがあるのかの指標となる部分であるが，多少ではあるが２段階においてその重要性への気づきが窺える。

実習前教育において 1, 2 段階の大きな違いが見られたのは，社会福祉実習の意味と意義の理解，

表2(社) 実習課題が明確になったか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
なった	2	6.25	4	12.50
ある程度なった	19	59.38	18	56.25
あまりならなかった	10	31.25	8	25.00
あまりならなかった	1	3.13	2	6.25
総計	32	100.00	32	100.00

表3(社) 実習課題の達成方法が明確になったか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
なった	2	6.25	3	9.38
ある程度なった	17	53.13	13	40.63
あまりならなかった	11	34.38	14	43.75
全くならなかった	2	6.25	2	6.25
総計	32	100.00	32	100.00

表4(社) 実習施設の制度的基盤が明確になったか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
なった	2	6.25	5	15.63
ある程度なった	17	53.13	17	53.13
あまりならなかった	12	37.50	9	28.13
全くならなかった	1	3.13	1	3.13
総計	32	100.00	32	100.00

ソーシャルワークの過程の理解である（表６(社)，表７（社））。１段階において漠然としていた社会福祉士像，ソーシャルワークの現状を体験的なレベルであったかもしれないが，実際に触れてきた結果であろう。

表5(社) 実習施設の情報収集を行ったか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
積極的に行った	4	12.50	9	28.13
行った	19	59.38	18	56.25
あまり行わなかった	9	28.13	4	12.50
全く行わなかった	0	0.00	1	3.13
総計	32	100.00	32	100.00

表6(社) 社会福祉士実習の意味と意義について理解できたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	2	6.25	4	12.90
ある程度できた	14	43.75	21	67.74
あまりできなかった	16	50.00	5	16.13
全くできなかった	0	0.00	1	3.23
総計	32	100.00	31	100.00

表7(社) ソーシャルワークの過程について理解できたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	2	6.25	3	9.38
ある程度できた	15	46.88	20	62.50
あまりできなかった	13	40.63	8	25.00
全くできなかった	2	6.25	1	3.13
総計	32	100.00	32	100.00

② 実習中教育について

表8（社）では実習課題を実習先と共有できたかどうかについては，1段階ではよくできたが6.5%であったのに対し，2段階では50.0%と大きく伸びている。また表9（社）の実習課題の達成方法の共有でも，2段階では約80％がよくできた，ある程度できたとしている。これは自分自身の実習課題を実習先に明確に表現できたことの結果と言えるのではないか。実習生として何を学び，何をするべきかを2段階実習では具体的にイメージできつつあるといえる。

表8(社) 実習課題を実習先と共有することができたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	2	6.45	16	50.00
ある程度できた	15	48.39	10	31.25
あまりできなかった	11	35.48	3	9.38
全くできなかった	3	9.68	3	9.38
総計	31	100.00	32	100.00

表9(社) 実習課題の達成方法を実習先と共有することができたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	2	6.25	12	38.71
ある程度できた	13	40.63	13	41.94
あまりできなかった	14	43.75	4	12.90
全くできなかった	3	9.38	2	6.45
総計	32	100.00	31	100.00

表10（社）では利用者の情報収集について聞いている。結果はやはり2段階でよくできた，ある程度できたが多くを占めるが，表11（社），表12(社），表13（社）でアセスメント，援助計画策定の達成及び評価についての問いになると，2段階における実習課題の共有や達成方法ほどの大きな伸びはみられない。これは自らが収集した利用者の情報や学んできたであろう援助技術を具体的な援助，支援に応用する技術が備わっていないことを意味しているであろう。

しかし表14（社）の他業種と連携についての学びについては，よくできたが1段階で15.6%だったのに対し2段階では34.4%であり，ある程度できたと合わせると大半の学生ができたと感

表10(社) 利用者についての情報収集はできたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	3	9.38	8	25.81
ある程度できた	14	43.75	18	58.06
あまりできなかった	14	43.75	5	16.13
全くできなかった	1	3.13	0	0.00
総計	32	100.00	31	100.00

表11(社) アセスメントはできたか

	1段階		2段階	
	人数	%	集計	%
よくできた	2	6.25	4	12.50
ある程度できた	7	21.88	12	37.50
あまりできなかった	18	56.25	14	43.75
全くできなかった	5	15.63	2	6.25
総計	32	100.00	32	100.00

表12(社) 援助計画の策定はできたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	2	6.25	3	9.38
ある程度できた	5	15.63	10	31.25
あまりできなかった	9	28.13	14	43.75
全くできなかった	16	50.00	5	15.63
総計	32	100.0	32	100.00

表13(社) 援助過程の評価はできたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	1	3.23	3	9.38
ある程度できた	7	22.58	13	40.63
あまりできなかった	11	35.48	10	31.25
全くできなかった	12	38.71	6	18.75
総計	31	100.00	32	100.00

じている。社会福祉士は様々な専門職間のコーディネーター役も担っており，他業種の連携を学べたと実感できたことは大きな意味を持つであろう。

表14(社) 他職種との連携については学べたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	5	15.63	11	34.38
ある程度できた	13	40.63	15	46.88
あまりできなかった	13	40.63	6	18.75
全くできなかった	1	3.13	0	0.00
総計	32	100.00	32	100.00

③実習後教育について

実習課題と実習方法の評価についてであるが(表15(社)，表16(社)) 1，2段階において，評価できたとした学生の数に大きな差は見られない。反対にまったくできなかったとする学生が2段階で存在する。これは実習に対する振り返り，反省の機会が不十分であったことの可能性が考えられ，実習後の大学における事後指導のあり方を再検討する必要があるだろう。

表17(社)では，学生は自らの特性を発見し，福祉専門職としてふさわしいかどうかについて考えたことを聞いている。いわゆる自己覚知であるが，人を支援することを業務とする福祉専門職を目指す者にとって自分自身を知ることは重要である。学生達の多くは実習に際して，自分自身について多くの発見や気付きがあったことが窺える。

表15(社) 実習課題の評価はできたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	2	6.25	5	15.63
ある程度できた	21	65.63	22	68.75
あまりできなかった	9	28.13	3	9.38
全くできなかった	0	0.00	2	6.25
総計	32	100.00	32	100.00

表16(社) 実習方法の評価はできたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	1	3.13	4	12.50
ある程度できた	22	68.75	22	68.75
あまりできなかった	8	25.00	4	12.50
全くできなかった	1	3.13	2	6.25
総計	32	100.00	32	100.00

表17(社) 自らの性格傾向や行動傾向を知ることができたか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	10	31.25	17	54.84
ある程度できた	19	59.38	14	45.16
あまりできなかった	3	9.38	0	0.00
全くできなかった	0	0.00	0	0.00
総計	32	100.00	31	100.00

表18(社) 実習に満足しているか

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
大変満足している	1	3.13	16	50.00
ある程度満足している	23	71.88	12	37.50
あまり満足していない	7	21.88	3	9.38
全く満足していない	1	3.13	1	3.13
総計	32	100.00	32	100.00

表19(社) 満足している理由(複数回答不可)

	1段階		2段階	
	人数	%	人数	%
実習の期間がよかった	0	0.00	0	0.00
実習の時期がよかった	0	0.00	0	0.00
実習施設がよかった	10	40.00	8	28.57
指導職員の指導内容がよかった	1	4.00	8	28.57
実習内容がよかった	5	20.00	5	17.86
利用者との関係がよかった	3	12.00	3	10.71
担当の教員がよかった	0	0.00	0	0.00
関心のある施設だった	6	24.00	3	10.71
その他	0	0.00	1	3.57
総計	25	100.00	28	100.00

④　実習の満足度

実習の満足度（表 18（社））は 1，2 段階において大変満足している，ある程度満足しているとしたものの合計は 2 段階の方が高く，さらに大変満足しているとする学生が 3.1％から 50.0%に増えている。満足している理由（表 19（社））も 1 段階では“施設がよかったから”とするものが突出していたが，2 段階では様々な理由が挙げられている。特に実習施設指導職員の指導内容がよかったからとするものが 28.6% と多く，実習現場が充実していたことが窺える。反対に担当教員についての評価が良くなく，大学側の指導の再検討が必要であろう。

また，満足していない理由については紙面の関係から詳細は省略するが，1，2 段階で共通するのは実習時期に関するものだった。しかし非常に特徴的だったことは実習施設指導職員の指導内容に対するものが 1 段階では 16.7％あったのが 2 段階では 0％となっていることである。実習現場の充実ぶりがここからも窺える。

⑤総合評価

社会福祉士の専門性や具体的な業務内容への理解であるが，名称独占である社会福祉士はその専門性が明確にしづらい部分がある。しかし，表 20（社），表 21（社）の結果からみると，実習において目の前で社会福祉士として働く職員を見つめてきたことで，大半の学生はそれをイメージ化できつつあるといえる。

しかし，社会福祉士が活躍している領域は多岐に及んでおり，またその領域において業務内容も異なってくる。社会福祉士の専門性が理解できなかった学生の存在も見逃せない。どの領域における実習であっても，社会福祉士の専門性がイメージできるように教員が指導，サポートしていく必要があるだろう。

表20(社) 社会福祉士の業務内容を理解できたか

	人数	%
おおいに理解できた	1	3.23
ある程度理解できた	24	77.42
あまり理解できなかった	5	16.13
全く理解できなかった	1	3.23
総計	31	100.00

表21(社) 社会福祉士の専門性や独自性を理解できたか

	人数	%
おおいに理解できた	3	9.68
ある程度理解できた	18	58.06
あまり理解できなかった	9	29.03
全く理解できなかった	1	3.23
総計	31	100.00

（2）　介護福祉専攻について

①実習前教育

介護実習は，これまで学内で学んできた教科教育と実践をつなぐ実践教育である。そこで実習前教育として，実習指導で実習施設の概要，実習内容，実習目標の立て方，実習日誌の書き方などの指導を行い，援助技術演習では，利用者との関わり方などをロールプレイングなどをとおして学習している。

また，個別に実習巡回担当の教員が実習課題の確認，課題達成のための具体的な方法などについての指導を行っているほか，学生自身により，これまで学んだ各教科目の復習も実習前に行わなければならない教育の一つである。

今回のアンケート結果によると，1段階における実習前教育については，実習課題があまり明確にならなかった25.0%，課題を達成するための方法があまり明確にならなかった35.7%，実習施設の制度基盤があまり明確にならなかった42.9%，介護実習の意味と意義があまり理解できなかった10.7%，介護サービスの援助過程があまり理解できなかった50.0%，コミュニケーションの技法があまり，または全く理解できなかった35.7%，記録の意味と具体的方法をあまり学ぶことができなかった35.7%という結果が得られ，項目によっては50%の学生が教員の意図した内容を理解していないことが分かった。

一方，最終段階の介護実習で同じ項目を見てみると，明確にならなかったり理解できなかった学生の割合は10～20%で，すべての項目で減っていることが分かった。また，学生の実習に対する状態も，1段階では実習施設の情報収集をあまり行わなかった21.4%であったが，最終段階では14.3%と減っていた。

以下に掲げる表の「介」とは介護福祉専攻の略である。

最終段階の介護実習になると実習のイメージを持ちながら実習前指導を受けることで実習課題の達成方法や実習の意義について理解が可能となるが，1段階では実習のイメージを持つことができず不安ばかりが先行していることが考えられる。

表1(介) 実習課題が明確になったか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
なった	5	17.86	10	35.71
ある程度なった	16	57.14	15	53.57
あまりならなかった	7	25.00	3	10.71
全くならなかった	0	0	0	0
総計	28	100.00	28	100.00

表2(介) 実習課題を達成するための方法が明確になったか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
なった	4	14.29	11	39.29
ある程度なった	14	50.00	13	46.43
あまりならなかった	10	35.71	4	14.29
全くならなかった	0	0	0	0
総計	28	100.00	28	100.00

表3(介) 実習施設の制度的基盤が明確になったか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
なった	6	21.43	7	25.00
ある程度なった	10	35.71	14	50.00
あまりならなかった	12	42.86	6	21.43
全くならなかった	0	0	1	3.57
総計	28	100.00	28	100.00

表4(介) 介護実習の意味と意義を理解できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	3	10.71	7	25.00
ある程度できた	22	78.57	21	75.00
あまりできなかった	3	10.71	0	0
全くできなかった	0	0	0	0
総計	28	100.00	28	100.00

表5(介) 介護サービスの援助過程について理解できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	3	10.71	8	28.57
ある程度できた	11	39.29	15	53.57
あまりできなかった	14	50.00	4	14.29
全くできなかった	0	0	1	3.57
総計	28	100.00	28	100.00

表6(介) コミュニケーションの技法を理解できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	4	14.29	5	17.86
ある程度できた	14	50.00	18	64.29
あまりできなかった	8	28.57	4	14.29
全くできなかった	2	7.14	1	3.57
総計	28	100.00	28	100.00

表7(介) 記録の意味と具体的方法を理解できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	3	10.71	7	25.00
ある程度できた	15	53.57	18	64.29
あまりできなかった	10	35.71	3	10.71
全くできなかった	0	0	0	0
総計	28	100.00	28	100.00

表8(介) 実習施設の情報収集を行ったか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
積極的に行った	1	3.57	5	17.86
行った	21	75.00	19	67.86
あまり行わなかった	6	21.43	4	14.29
全く行わなかった	0	0	0	0
総計	28	100.00	28	100.00

②実習中教育

実習中教育は，実習施設の指導者と連絡を密にとりながら，実習巡回をとおして介護実習内容および実習課題の到達状況の確認，指導を行ないながら，学生が実習課題を達成できるよう支援すると同時に，介護実習を通して学んだことと，これまでに学んできたこととの統合を推し進めることである。

1段階介護実習のアンケート調査の結果からは，実習課題を施設とあまり共有できなかった42.9%，実習課題を達成するための方法を施設とあまり共有することができなかった50.0%と回答しており，初めての2週間の実習で実習課題を達成するために施設の何をどのように活用してよいのか分からない戸惑いが窺える。

表9(介) 実習課題を施設と共有できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	5	17.86	11	39.29
ある程度できた	11	39.29	13	46.43
あまりできなかった	12	42.86	2	7.14
全くできなかった	0	0	2	7.14
総計	28	100.00	28	100.00

表10(介) 実習課題を達成するための方法を施設と共有できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	3	10.71	11	39.29
ある程度できた	11	39.29	12	42.86
あまりできなかった	14	50.00	2	7.14
全くできなかった	0	0	3	10.71
総計	28	100.00	28	100.00

また，介護の主たる課題である利用者の情報収集やアセスメント援助計画の策定などを意識して実習を行うことは，50％～80％の学生があまりまたは全くできなかったと回答しており，目の前で行われている介護業務を経験するだけであることが分かる。

一方，最終段階の介護実習では，実習課題や実習課題を達成するための方法を，施設と共有することができたと回答した学生が80％を超え，実習課題を達成するために学生自らが施設に働きかけていることが分かる。実習内容も目の前の介護業務にだけ目を奪われるのではなく，利用者の情報収集アセスメント，援助計画の策定，援助過程の評価などの実習ができたと80％～90％の学生が答えており，介護の核心に向かって介護実習を行なえたことが窺える。

表11(介) 利用者の情報収集はできたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	6	21.43	12	42.86
ある程度できた	8	28.57	14	50.00
あまりできなかった	11	39.29	1	3.57
全くできなかった	3	10.71	1	3.57
総計	28	100.00	28	100.00

表12(介) アセスメントを意識できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	4	14.29	11	39.29
ある程度できた	3	10.71	12	42.86
あまりできなかった	15	53.57	4	14.29
全くできなかった	6	21.43	1	3.57
総計	28	100.00	28	100.00

表13(介) 援助計画の策定を意識できたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	3	10.71	7	25.00
ある程度できた	1	3.57	18	64.29
あまりできなかった	13	46.43	1	3.57
全くできなかった	11	39.29	2	7.14
総計	28	100.00	28	100.00

表14(介) 援助過程の評価はできたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	1	3.57	5	17.86
ある程度できた	3	10.71	18	64.29
あまりできなかった	8	28.57	3	10.71
全くできなかった	16	57.14	2	7.14
総計	28	100.00	28	100.00

今後の課題としては，1段階の実習においても利用者を主体としたアセスメント，援助計画の策定など介護過程の展開を意識した実習が行えること，また，最終段階においては，すべての学生が介護過程の実践ができるような方向での指導である。

③実習後教育

実習後教育は，学生が実習報告書を書くことで実習を通して学んだことを整理し，福祉現場における実態と学内で学んできたこととの統合をはかると同時に，実習施設で作成された実習評価をもとに実習を振り返り，次なる介護実習のステップに向かっての課題を設定するための指導を行っている。

調査結果アンケートでは，1段階での実習課題の評価はあまりできなかった25.0％，実習方法の評価があまりできなかった21.4％，実習で自らの性格傾向や行動傾向をあまり知ることができなかった17.9％に対し，最終段階では実習課題の評価があまりできなかった0％，全くできなかった7.1％，実習方法の評価があまりできなかった7.1％，全くできなかった7.1％，実習で自らの性格傾向や行動傾向をあまり知ることができなかった3.6％，全くできなかった3.6％であり，各項目とも割合は減ってはいるものの，それぞれの項目で全くできなかったと答えた学生がおり，さらに一人ひとりに細かな指導が必要であると考えられる。

④介護実習に対する学生の満足度

1段階実習で満足していると答えた学生は71.4％，満足していない28.6％，最終実習では満足している85.7％，満足していない14.3％であった。また，いずれの段階においても，満足し

表15(介) 実習課題の評価はできたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	3	10.71	4	14.29
ある程度できた	18	64.29	22	78.57
あまりできなかった	7	25.00	0	0
全くできなかった	0	0	2	7.14
総計	28	100.00	28	100.00

表16(介) 実習方法の評価はできたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	4	14.29	3	10.71
ある程度できた	18	64.29	21	75.00
あまりできなかった	6	21.43	2	7.14
全くできなかった	0	0	2	7.14
総計	28	100.00	28	100.00

表17(介) 自らの性格や行動の傾向を知ることができたか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
よくできた	9	32.14	11	39.29
ある程度できた	14	50.00	15	53.57
あまりできなかった	5	17.86	1	3.57
全くできなかった	0	0	1	3.57
総計	28	100.00	28	100.00

ている理由も満足していない理由も，共に一番多かったのは実習施設の状況であり，２番目には実習内容が良かったかどうかであった。

学生の実習に対する満足度は，１段階よりも最終段階の実習の方が満足している学生が多く，全体的に見ても多くの学生が介護実習については満足していることが分かる。このことの理由の一つとして，介護実習は１段階から最終段階へと積み上げていく体制が整っており，最終段階の実習では相応の介護技術を身につけ，自分で考えながら介護を実践することができるようになること，担当の利用者との関係で，直接，利用者の変化を実感できることが挙げられ，その成果が現れているものと考えられる。

表18(介) 各段階の実習に満足しているか

	1段階		最終段階	
	人数	%	人数	%
大変満足している	3	10.71	11	39.29
ある程度満足している	17	60.71	13	46.43
あまり満足していない	6	21.43	2	7.14
全く満足していない	2	7.14	2	7.14
総計	28	100.00	28	100.00

表19(介) 満足している理由(複数選択不可)

	1段階		最終段階	
	人	%	人数	%
実習の期間が良かった	1	5.56	0	0
実習の時期が良かった	0	0	0	0
実習施設が良かった	7	38.89	8	33.33
指導職員が良かった	1	5.56	3	12.50
実習内容が良かった	4	22.22	7	29.17
利用者との関係が良かった	1	5.56	2	8.33
担当の教員が良かった	2	11.11	1	4.17
関心のある施設だった	0	0	0	0
その他	1	5.56	0	0
複数	1	5.56	3	12.50
総計	18	100.00	24	100.00

(以上，第２章　調査研究の結果の項における，アンケート結果の数値については，小数点以下第一位までの標記とした)

第３章　考察

(１)　社会福祉専攻について

結果の分析にみるように，ほとんどすべての項目について，社会福祉専攻と介護福祉専攻の学生の間で一貫した差異が見られた。すなわち，データからは，社会福祉専攻の学生は介護福祉専攻の学生に比較して，実習の意義や課題・方法が明確にならず，アセスメントや援助計画を作成することができず，専門職としての力量や課題解決の方法が身につかず，業務理解も不十分であると読み取れるのである。

さらに実習の回を重ねることで，介護福祉専攻の学生は目覚しい成果を獲得して行くのに対し，社会福祉専攻の学生はそれが不十分なままにとどまっていたり，場合によっては逆に混乱を深めてしまったりしていると考えられる。わずかに実習施設に関する満足度や指導職員とのかかわりで両者は肩を並べているだけである。

これはいかなる理由に基づくのであろうか。介護職に求められる援助技術と社会福祉職に求められる援助技術との間の基本的な違いが考えられる。介護職の場合，基本技能・技術とその適用領域は具体的で明確であり，実習に関する厚生労働省のガイドラインも確立している。

他方で，社会福祉職の場合は，その技術は個別援助やグループワークに関するものから，あらゆる人，機関との交渉術や地域や関係者の組織化，法的制度の適用や施設・事業の経営管理に至るまでの多岐にわたり，またその適用分野は限りない広がりを持っている。

こうしたことから，個々の実習における課題や方法を簡潔に明瞭に規定するのは，その業務や技術の性格上，難しいということである。社会福祉の技術や守備範囲が幅広く，短期の実習では目に見える成果を挙げにくいことはまさにその通りである。しかしそれだけであろうか。もう少し掘り下げてみたい。

社会福祉実習は，個々の施設における実習条件も多様である。一般に児童相談所や児童・母子関係の実習先では利用者との接触は最小限にとどめられて個人記録の閲覧もかなわず，実習内容はもっぱら施設･機関の機能とスタッフの業務の理解に集約される傾向にある。対照的に障害者や高齢者施設では日々の利用者とのコミュニケーションが全てであるような様相を示す傾向にある。また実習指導者の職種の違いによっても求められる実習内容が変わる。さらに高齢者施設では介護サービスに関わるか，関わらないかで大いに異なってくる。

ここでは，実習先により受け入れ体制や条件がいろいろ違うことを必ずしも否定的には捉える必要はない。なぜなら社会福祉士には，与えられた制約や条件の中で，様々なものを感じ取り，何かを発見し，そこから自ら考え，組み立てていくという，豊かな感受性とフレキシブルな能力が求められているからである。

その点からすれば，実習条件の多様性はむしろ望むべき事柄でさえあるといえる。むしろその自由度の高さを活かすことができているか否かが問われるのである。残念ながら今回の調査結果は本学の社会福祉実習ではそれを活かした実習ができていないことを如実に示してしまっている。

現状の社会福祉実習では，介護がうまくできたかどうかで一喜一憂したり，利用者とのコミュニケーションの成否のみに意識が集中したり，いろいろなハプニングに翻弄されて，よく分からないまま実習が終わってしまったというようなことが少なくない。

本学の社会福祉実習が“多様性”ではなく，逆に“混沌”を提供してしまっているように見える現状は，社会福祉職養成課程における早急に改善を要する課題である。

今後，社会福祉実習の成果を上げていくためには，第一に，シラバスの見直し，再編が急務である。特に１，２年次の援助技術論，３，４年次の援助技術演習，実習指導の３科目は社会福祉実習に向けて有機的に連動したカリキュラムとして提供されていなければならない。

加えて，実習指導については，各教員が自分の専門領域の実習についてのみ，他と無関係に解説して持ちまわるという縦割り授業形式を脱却し，例えば，担当教員ごとの系統的なゼミ形式で，違う分野に実習に行く学生同士が情報交換をしながら実習準備を進めるような形を，もっと多く取り入れていく必要があると考えられる。

第二に，実習の方法や目標についての統一された理念の確立と，実習プログラムの具体的な提示が不可欠である。現状の社会福祉実習が一見して“多様性”を呈しているのは，実習の目的やゴールを，実習を行う当事者である学生，そして，実習先との関係で，明確に提示できていないからだとも言える。

加えて，このことに関しては，各大学，養成校とも様々な模索を試みて，独自の実習プログラムを提示しているところも少なくない。そのいくつかに目を通してみると，その一つの印象として，あまりに“重装備過ぎる”側面を感じる。これでは実習を引き受ける側が引いてしまわないかとの懸念も生ずる。

よりコンパクトで的確な実習プログラムを作成し，その実施に当たっては個々の実習の受入れ先との間で，柔軟に調整できるようにする必要があ

ると考える。

実習の方法論の統一に際しては，先ず，大学としての考え方を明確にした上で，実習先施設，機関と大学との共同作業を通した，実習プログラムの作成準備作業が必要である。その端緒として，昨年 12 月から，本学人間福祉学科の実習ワーキングを構成する教員が中心となり，介護実習との棲み分けがあいまいな状況にある，特別養護老人ホームでの実習について，いくつかの施設の担当者の協力を得て，実習プログラムの標準化に向けて共同作業を開始したところである。半年後を目処にこれを完成させ，実習教育改革の突破口として行きたいと考えている。

（2） 介護福祉専攻について

介護実習は，これまで学内で学んできた教科教育と実践をつなぐ実践教育である。介護福祉士養成カリキュラム 1650 時間のうち介護実習を 450 時間行うことが定められており，本学では特に介護実習を重視し 488 時間を実習に充てている。また，介護実習を第一段階，第二段階前期，第二段階後期，第三段階および訪問介護実習の５回に分割し実施しているが，第一段階から第三段階までの施設実習に関しては段階を追って積み上げ方式で課題を設定し実習を行なっている。

今回のアンケート調査結果をみると，実習課題とそれを達成するための方法，介護実習の意味と意義の明確化などすべての項目で１段階実習より最終段階実習で理解度が増していることがわかった。段階を追って実習を設定していることから考えると当然の結果だとも言えるが，１段階実習においても実習課題を達成するためには，実習を体験している上学年の学生の体験談を聞くなど，具体的なイメージを持たせながらより細かな実習前指導を行なっていくことが重要だと考えられる。

また介護実習に対する満足度についてのアンケート調査でも，１段階実習よりも最終段階実習の方が満足している割合が高くなっており，最終段階実習で満足を感じている学生の割合は 85.7% とかなり高い結果が得られた。学生が介護実習において満足している理由も満足していない理由も，共に１番多かったのは実習施設の状況であり，２番目に実習内容が良かったかどうかであった。これは一概に実習施設の実習受け入れの状況に問題があることを意味するものではなく，同じ施設でも実習学生によって施設が良いかどうかの感じ方は様々である。

このことは学生個々人のパーソナリティやその学生と施設の相性の問題などもあると思われるが，学生の設定した実習課題を達成することができたかどうかが多いに関係していると考えられる。もちろん実習受入れ体制が整わない施設，例えば非常勤職員が多く介護実習指導を的確に行うことができない施設などに対しては，学生を実習に送り出す側の大学として，常に実習先としての良否を見極める必要はあるが，同時に，実習施設の職員の質の向上のために行なわれる研修などに協力するなど大学教員ができることは積極的に協力していく必要もあろう。

また学生が実習目標を達成できるようにするためには実習指導担当教員による巡回指導は重要な役割を果たしており，介護実習内容および実習課題の到達状況の確認，指導を行ない学生が実習課題を達成できるよう支援すると同時に，学生が実習中に抱いている疑問や不安に対して，利用者との関係においてそれがどのような意味をもつのかということを，学生自身が整理できるように支援することが求められている。

また，介護実習のもう一つの目的として「理念・価値，自己決定，尊厳」といった概念と実践とを結びつけ，学生自身の中に専門職としての介護福祉士像を描くということがある。学生は理想と現実との違いに戸惑いを感じ，時に実習の目標を見失うこともある。この場合にも巡回指導による教員の指導が有効となる。

しかし，現状では授業や学校行事のかたわらで週２回の巡回指導を確保することは難しい。介護実習においては厚生労働省の一定の枠組みがあるため実習プログラムの標準化はかなり図られているといえる。今後学生が実習目標を達成し，介護実習において満足感を得るためには，施設との密なる連携と学生にどれだけ関われるかということがポイントとなるであろう。

おわりに

以上，「実習に関するアンケート」の集計結果を整理することから，その調査結果内容についての考察を行なってきた。

今後，現在の本学の実習システムにおいて，学生自身の抱く実習に対する様々な「不満」を，具体的にどのように緩和,改善していくべきなのか。他方で，どのようにして，学生が実習を通じて社会福祉専門職としての問題解決能力を獲得していく一歩としていくべきなのか。

これらの相互に重要で密接不可分な問題に対して，先ず，本研究における調査結果とその考察を通して，当事者である学生自身が実習前教育（指導），実習中教育，実習後教育（指導）において実習の意味，意義，内容，方法についてどのように受け止めているのかを明らかにしてきた。

その結果，現状の社会福祉実習と介護実習では，実際に実習を行なってきた学生自身によるアンケート結果から，主に社会福祉実習の在り方の改善が急務であることを指摘しなければならいと言える。

そのことから，今後は，現在の実習システムを，社会福祉専門職養成にとって効果的で効率的なものとして具体的に機能させていくための，パイロット・スタディの必要性が俄かに急がれていると言わなければならない。

また，そのパイロット・スタディは，学生の社会福祉専門職としての育成に関して，本研究における調査結果内容とその考察を通して，大学と社会福祉実践現場がどのような協働関係を構築していく必要があるのかを，模索する方向性のなかで着手しなければならないと考えている。

特に，社会福祉実習に関して，先ずは，具体的に特別養護老人ホームをはじめとする高齢者福祉分野における“モデル実習”の試行からスタートさせて，各分野ごとの実習における標準的なプログラムの作成に向けて，本研究から得られた知見を活かしていくことが必要であると考えている。

そうした実習プログラムを，実際に活かした実習の展開によって，学生による社会福祉士の業務のイメージすることを具現化することや，その業務の実務的な理解を少しずつでもサポートしていく必要があると言える。

最後に，今回のアンケート調査と本研究から得られた知見が，今後の本学における社会福祉及び介護実習と実習指導のあり方について，そのより良い方向への改善に向けての第一歩の糧になれば幸いであり，あらためて，忙しい中を「実習に関するアンケート」に協力してくださった社会福祉専攻，介護福祉専攻の学生の皆さんに謝意を表したい。

(2006.3.15 受付　2006.5.17 受理)